竹内式部の天皇観―桃園天皇への『日本書紀』御進講の「目的」について―

國學院大學大学院文学研究科　神道学・宗教学専攻　博士後期課程　大貫大樹

竹内式部（正徳二〈一七一二〉年～明和四〈一七六七〉年）を思想的背景にして起きた宝暦事件については、今日に至るまで多くの先学によって論じられてきた。しかし、諸先学に於いては、未だ問題の根幹に掛かる点が明らかではない。それは、式部門弟が御進講を行う「目的」である。仮に彼らが何らかの「目的」意識を抱きながら、御進講を行っていたとすれば、それを桃園天皇へ御伝えせんと試みていたのではなかろうか。

そこで、本発表に於いて検討するのは、東京大学史料編纂所「徳大寺家本」に蔵せられた、『進講筆記』である。同書の内容を検するに、竹内式部の天皇観と御進講を行う「目的」を知る事が出来る。『進講筆記』とは、一時的に御進講が中断された際、桃園天皇の命に応じて式部門弟らによって編まれた書であった。同書に見える式部の天皇観とは、楽観的に天皇の御位が常に保証されるものとは考えず、三種の神器に備わる君徳を天皇御自ら「守護」せられ、君としての御責務を果たしていただく事を望むものであった事が分かる。式部門弟もまた天皇が君徳を持って、万民の為に「祭政」を担い、国を統治される御責務を果たしていただく為に、君徳を涵養せしめる『日本書紀』御進講に臨むのであった。『進講筆記』を検討する事で宝暦事件の実態を明らかにする基礎的作業の一端になる事はもとより、竹内式部が『日本書紀』から説いた特徴ある神学をも明らかにする事で彼の思想史的研究の補充にもなるであろう。